

だった。あまりの嬉しさに一芝居うとうと思ひ、玄関

の戸をトントン、トントンとたたく。中の方より誰かが何か用かと聞いてくる声があった。「すみません、一、

三日何も食べていないのですが、今夜一夜庭の隅をお借りできないでしょうか」「だめ、だめ、誰だ」と言

い、弟達が出て来た。あれ、兄ちゃんや、本当か、兄ちゃんやなと飛びついてきて、抱き合つて声を上げて

泣いた。父母も元気でいた。よう帰つてこれたな、父は神棚に灯明して長々と頭を下げている。みんなで朝

まで色々と話し合った。そして夢にまで見た米の御飯と母の料理を涙してかみしめた。

最後に、異国の地に永眠された数多くの皆様の御霊に心より冥福をお祈り申し上げます。

【執筆者の紹介】

佐々木氏は大正十年一月、十二人兄弟の長男として生を受け、昭和十八年五月、名古屋中部第八部隊に入隊の後、渡満。東安省、東安第三七五九部隊に所属、国境警備に従事。昭和二十年八月、終戦、シベリア抑

留。昭和二十二年五月、復員。

帰国後、出征前の会社、王子製紙に復職し、六十五歳で定年退職。

現在は元気な孫達にも恵まれ、近所の農家の休耕田を預かつて野菜作りに励み、幸福です、家族の笑顔が何よりの楽しみです、と淡々と語る彼の日焼けした顔が印象的でした。

中津川支部の会員として県連の行事には積極的に参加されており、貴重な人材です。

(岐阜県 鈴木 善三)

一兵士の虜行記

愛媛県 稲見 正

はじめに

私は、昭和十六（一九四一）年十二月八日、満州の北端、北緯五十一度を越す黒龍江の上流にある法別拉（ホウベラ）で大東亜戦争開戦の大詔を承り、昭和二

十年八月十五日、終戦の詔勅を、北緯四十一度余の鴨緑江に近い東辺道の山中にある通化で承った。そして昭和二十四年九月十八日、祖国の舞鶴に生還した。

具体的には、満州独立守備隊に入隊し、軍人としての基本を聖地旅順に学び、満州鎮護という伝統の大任を自負して、東辺道に北滿にと討匪戦の遊撃隊員として銃火の下に挺進した。関特演では第四軍の作戦書記となつて孫呉に、そして大東亜戦争以降は、関東軍幕僚付として総司令部の作戦書記を務めた。ソ連軍侵攻、終戦処理に際しては、その裏方の一人として働き、最後はシベリアに抑留され、四年間を苛酷な労働に従事せしめられた生粋の関東軍兵士である。

この書は私のシベリアにおける望郷歌であり、体験記である。新京（長春）出発からナホトカに至るまで、小さい文字で順次克明に記録し、シベリア民主運動の狂風下でも、あるいはリュックサックの底に、あるいはその負い紐の中に、時には作業衣の中にと逐次隠しながら書き続けたが、それらは最後にナホトカで反動として吊し上げられた際、同地の民主グループの

手で灰にされてしまった。まことに残念である。

シベリアより帰還直後の昭和二十四年十月ごろ、シベリアの悪夢として、そのまま忘れ捨て去るに忍びず、古いノートと、セメントの紙袋で作ったメモ帳に、思い出すまま殴り書きしたものが今も手許にある。往時を回顧して整理してみることにした。何分にも未熟な一兵士の著しく主観的な虜行記であるが、文中にお名前のお出る方々は、現存または故人ともすべて実名であり、一片の創作も何ら資料の引用もない、そのままの体験記である。今ごろこのような物を引っ張り出すと、やはり反動の偏見記と笑われ、現在のソ連は……と、批判される向きも多いことと思うが、これはあくまでも私個人の記録である。現在の日本は戦争と空腹を知らぬ世代となり、豊かな経済大国で、世界の日本として、ソ連の姿勢にも何か影響を見せるかのように思われているが、彼の国には「知識がなければ敵の知識を使え、技術がなければ敵の技術を使え、金がなければ敵の金を使え」という原則があり、また日本人には警鐘ともいふべき「墮落するまで待て」とい

うのがあったことを思うとき、終戦後、不法不当に略取した我が国固有の北方領土について、今なお何らの進展もないのに厚顔微笑を寄せるソ連は、その本質において少しも変わっていない。

シベリア生還五十年に当たり、我が児孫への遺品としたく、あえて古笈を開いた次第である。

苛酷なる強制労働と飢餓により、念願の祖国の土を踏むことなく、湖北の凍土の下に眠る数万戦友の無念の霊に対し、終生哀悼の誠を捧げ、その加護に感謝して合掌する。

関東軍司令部の最後

昭和二十年八月十四日、作戰司令部を通化に移転したばかりの総司令官山田乙三大将が、終戦の大詔あるを予知せられ、総参謀長秦彦三郎中将、同副長松村知勝少将、草地貞吾参謀、瀬島竜三参謀を従え、急ぎよ新京に飛び帰る際に、作戰班長草地貞吾大佐から「山崎（作戰班庶務山崎力少尉）一人では手が足りん、飛行機を折り返すから急いで続行せよ！」と命令されて

飛行場に待機し、十六日昼ごろ、ようやく飛来したスーパー機に、たまたま臨江より到着した満州国の日系要人等六人を使乗させて新京に飛び帰った。

わずか四日間で帰った軍司令部であるが、各階、各室とも無人で、廃家の屋内の如く不気味であった。ただ、すでにラジオによって大詔を承り、また大本営に急派された参謀副長松村知勝少将と連絡のとれた統帥部系統は、各参謀の足音も高く、異様な興奮に包まれていた。四年間座った作戰書記室の自席に戻り、早速任務に就いた。終戦の天命を受電した作戰室では、山田総司令官を中心に秦総参謀長以下、在京の全参謀が集まり、殺気立った最後の作戰会議が夜を徹して続いた。

総司令官山田大将の「承詔必謹」の決断があり、直ちに「即時戦闘行動を中止すべし」の命令が発令せられた。緊張に震えながら、悲痛極まる終戦命令を、隸下各軍等に至急電報すると共に、関総作戦命甲第六号による最後の総軍命令の浄書、伝達任務に当たった。その間、旧城内の巡察に赴いた山岸、入江両参謀の戦

死等あわただしく続く。八月十七日には、一カ月ほど前まで関東軍作戦参謀として勤務せられ、日夜お仕えした竹田宮恒徳王殿下が、終戦の聖旨伝達の勅使として御来京せられた。翌十八日には隷下全軍参謀長の緊急会同があり、また終戦命令未達のため、なお戦闘継続中の部隊に対し、土田正人少佐外、軍使の派遣等に伴う事務を、先任の山崎力少尉を助けて不眠不休で実施した。

八月十九日の先発を皮きりにソ連軍の新京進駐が始まり、二十日にはザバイカル方面からガバリョフ大將が到着し、八月二十二日、遂に屈辱と悲涙で、栄光に満ちた関東軍総司令部庁舎をソ連軍に明け渡し、関東軍四十年の光輝ある歴史を閉じ、後ろ髪引かれる思いで西広場にある海軍武官府庁舎に移った。

武官府庁舎移転後に、伊久良和男、赤城増男の両准尉、中瀬精一曹長が通化より列車で本隊とともに帰京し、作戦書記全員が揃った。

山崎少尉とともに作戦書記一回は、北に南にと軍使として、あるいは連絡にと不眠不休で奔走される草地

参謀ほか、各軍使への資料の準備や、自動車、飛行機の手配に苦勞する一方、無秩序に次々と来るソ連軍の苛酷な命令、指示の処理事務に当たった。

新京におけるソ連軍の数は日を追って増加し、武官府裏に隣接する児玉公園内におけるソ連兵による勝主計中佐以下五人の不法射殺を始め、侵攻ソ連軍の新京はもとより、全滿にわたる無統制極まる暴虐行為及び不逞滿鮮人の便乗不法行為等々、日夜織るが如き悲報の取次ぎや連絡に当たった。

僅かに、一台だけ隠していた無線機により、在留日本人の処置と、ソ連軍の暴虐行為につき東京と連絡をとりつつあったが、九月五日、ソ連軍の急襲的武装解除に際し、窓から裏庭に飛び降りて、その証拠の一切を焼却するなど、危機一髪の処置を行った。

最後に、総司令官以下全将官のソ連への連行にあたり、「将官には当番一人の随行を許す」とのソ連側の指示により、すでに軍使として先行している参謀副長松村知勝少将に随行するべく出発したが許されず、引き返して本隊（西広場の敷島高女内）に復帰するま

で、生命の危険を顧みることすら忘れての二十日間ほどであった。

新京別離の涙

昭和二十年十月三十日、新京発最終の作業大隊（長、大陸鉄道参謀池田尹彦少佐（47期）、副官、関東軍参謀部付加藤正幸大尉（54期）、一五〇〇人）の本部人事係として、南嶺の收容所（新京法政大学）を出発し、徒歩で大同大街を北進、新京駅に向かう。晩秋の新京は時雨空で、天また時に別離の涙をそそぐ。満州中央銀行、三中井百貨店、康徳会館と逐次別れ、ニッケを過ぎると関東軍司令部である。前衛に立ち風雲に峙し、万丈の堤の如くそびえ、仰ぎ見て誇りとし、使命感に充実して勤務した我等が居城も、新京十年の栄光一炊の夢と化し、本丸に赤旗が翻り、門には舟型帽の歩哨が立っている。この城を明け渡し、関東軍四十年の歴史を閉じた八月二十二日の屈辱と無念。九月五日の海軍武官府における武装解除、特に「ソ」軍侵駐以来の暴虐と、在満日本人の処置につき極秘に

東京と連絡をとりつつあった証拠等、間一髪の処置、総司令官山田乙三大将が生涯にわたる武勲の証である数多勲章の処置を依頼されたが、涙が溢れて將軍の顔が正視できなかつたこと、恩賜の軍刀を執り、長年たばさんだ愛刀を手渡された作戦班草地貞吾参謀、大本營の同僚宛「国家と民族の将来を頼む」のメモを残された瀬島竜三参謀、参謀副長松村知勝少将に随行すべく飛行場まで行つたが、機乗を許されず引き返したことなどが、走馬燈の如く脳裏をよぎる。司令部東門を通過、この門より東へ六百四十歩行けば百三十四日をもって終了したダイヤ街裏の我が家にいた。さらば、さらばと振り返りながら思い出の坂を下る。

市民に親しまれた児玉公園も、そのシンボルである児玉源太郎大將の像は、敗戦を象徴する如く首を落とされ、主なき馬の躍る姿が無惨である。新京神社の境内には、婦女子が主体の開拓団の人々とおぼしき一団が避難しているのが見え、哀れである。敗戦の異国に残し奉る祖国の神、願わくばこれら同胞とともに速かに帰国されんことを、ただ低頭して最後の祈りとす

る。やがてヤマトホテル周辺の森をぬぐらとし、我らとともに多年新京に暮らした数千のクラスに迎えられて新京駅着。直ちに虜行貨車の人となる。行き先は不明、先発は既に清津に出て日本に帰ったとか、あるいはソ連領を経てウラジオから乗船したとか、否、関東軍全員、ソ連に連行せられ、独ソ戦後の復興に強制労働させられるのだ等々、悲喜交々の情報が流れるが、真実は何も分からない。行き先不明のまま翌朝、列車は北に向かつて新京を後にする。さらば新京よ！ 去り難き新京、されど去らざるを得ぬ新京よ！ と別離の涙を流す。

北黒線懐古

食事受領と用便以外は下車を許さない幽閉された貨車、その中から見聞するハルビン駅構内における避難同胞の惨状は、正に地獄絵である。行き交う列車の狭間を汚れ疲れた無統制の群が、満人の売る食糧を求めて争うあり。息も絶えたかに見える赤ん坊を背負い、ただ南下する避難列車を尋ねさまよう若き母親、保護

者と離れ泣き叫ぶ子供達など……。だが如何ともしがたく、無事を念ずる無力と自責に泣く数日。ようやく出発した列車は牡丹江へと期待したが、依然北上する。東満の鉄橋はすべて破壊されているので、黒河からブラゴエ経由でウラジオストックに出るなどと、相変わらずデマが流れる。信ずるものを失った集団の流言蜚語は、物売りの擲揄侮言をも掴む。ハルビン以北は黒河まで、元第八独立守備隊の防衛担任区域で、小駅名までほとんど覚えていた。呼蘭、綏化、海倫と主要な駅では幾日も停車する。北満はすでに雪に覆われて敵しい表情を見せている。十一月も残り少なくなつた朝、思い出多い北安駅に着いた。

北安省は、昨春、急ぎよ南海に転ずるまで五年間にわたり、東洋平和の理想に燃え、満州鎮護を自負し伝統の精銳を誇った独立守備歩兵第十二大隊の守備区域であり、北安鎮は我が第二中隊の駐屯地であった。勝手知った駅、分遣隊舎が見えるが立ち入る術もない。祖国の防波堤となり、南太平洋の孤島に玉砕したのであろう原隊、上官、先輩、同僚、教え子達の顔が次々と

浮かんでは消え、万感去來の日が続く。北安駅をようやく発車した列車は、北に四十余キロメートル、広野の中の小駅二竜山に止まる。昭和十四年の夏、旅順の教育隊から磐石（奉吉線）に帰り、原隊とともに齋北線の克山に急進してきた際、分遣隊長として十二人の部下とともに一カ月間守備に任じた要衝である。赤レンガの小さな隊舎がそのまま残っている。あの時の隊員達は今どこに、戦雲急を告げるノモンハンの空を睨み、意気軒昂と配置についた一人一人が鮮明に蘇える。

国境の幽気

北黒線最長のノモール河の鉄橋は異常なく、匪襲戦の思い出の小興安、竜鎮を経て孫呉に到着する。この地もまた第四軍参謀部に作戦書記として、昭和十六年十二月中旬、新京に転属するまで勤務した軍都であり、これより以北は北正面の陣地帯である。駅舎を初め見渡す限りの施設はすべて砲爆撃に焼けただけその面影はないが、ソ連軍の侵攻を最後まで阻止した激戦

の跡を証明している。孫呉の第一師団、山神府の第五十七師団を初め、瑗瑗、神武屯、勝武屯、黒河、法別拉の各国境警備隊はか、この日に備えて黙々と訓練を重ねた当時の精鋭は、すべて南方戦場または本土決戦へと馳せ去り、残された寡兵よく不屈の闘魂をもって、殺到する大敵に対し勇猛果敢に抗戦し、建軍以来の真髓を発揮して、あるいは護国の鬼となり、あるいは万斛の涙をのんで矛を折ったであろう北正面の戦闘経過。孫呉以北は山河正に鬼哭啾啾、無念の幽気が漂い断腸の思いである。

黒龍江を渡る

新京を出発して不安と焦燥の北上一カ月、北黒線の終点に至り貨車を降りる。満州最北端国境の街、黒河は硝煙の跡も生々しく、見るも無残である。あの豊かな流れに神秘を漂わせたアムール川も冬將軍の前に慍伏し、満ソ国境としての蔽蔽なる使命を失った今は、どこからでも徒渉可能の極寒地河川である。新京以来のノロノロ運転は、これを待っていたのだ。

昭和二十年十二月一日、この日は雪こそ降っていないが、シベリアの烈風が足下から氷雪を顔にたたきつける。ゼーヤ河との合流点に近い黒龍江はさらに大きく、これが河であり、この氷の下を、遠く樺太の北端まで出て行く水が流れている等とはとうてい考えもできない見渡す限り雪と氷の大平原である。大きなリュックを背負い喘ぎながら行く者、即製の櫛に荷物を積んで引く者、落伍は凍死ぞ！と励ましながら前後する指揮者、遅れじと必死に歩く病弱者、その誰も、これが待ち構える長い地獄への旅路の入口とも知らず、シベリア鉄道でウラジオストクに出て日本に帰るのだ、と一縷の希望を托した若い兵士の顔には笑いさえ見える。純白の雪原に一五〇〇人の黒い列が、延々と蟻の連なる如く、ブラゴエシチェンスクの街へと入ソの歩を連んで行く。

ポツダム宣言受諾、大命による無条件降伏、関東軍武装解除、満州国崩壊と、風雪止に四十年、祖国の生命線、王道楽土の建設と父祖以来営々辛苦、築いてきた満州と決別する大日本帝国最後の姿である。

入ソ第一歩

ここがソ連領か！あのブラゴエカ、川岸に遊ぶ男女を遠望しながらいつの日か、と腕を撫したあの四季が去来して、雪を踏む足が急に重たくなり、無念の涙がまつ毛を凍らせる。ふと見ると防寒外套が走っている。あつ、チビだ！新京の路傍で飢えと疲労で倒れていたのを助けて、連れてこさせた深野少年（小学五年生）である。この小さな子供まで敵国にと思うと、自責で何ともやりきれない。ただ天運を祈ってやるのみ。

満州に侵攻したソ連兵の目に余る程度の悪さは、いやというほど味わってきたが、これはまたどうしたところか、初めて接するソ連住民の下劣さは、死体を食べる野犬の如く、追えども払えども我々の荷物を襲い掠める野盗の族（ヤカラ）である。

シベリア鉄道盗品沿線

「ダモイ東京」「日本に帰す」というソ連当局の言葉、半信半疑ながら祖国帰還だけを願う一五〇〇人の

集団を乗せた列車は、長蛇の如くのろのろと北上する。街を外れ雪に埋もれた無人の広野に至ると、驚いたことに路線の両側は、貨車から投げ降ろしたままの梱包の山また山である。満州攻掠三カ月、一刻を争う如く慌てふためいて、手当たり次第にある物すべてを強引に掠奪し尽くした、満州の物資機材が野ざらしのまま沿線果てしなく続く。あの目に余るソ連兵の暴虐は当然のことだったのだ。時と所とを問わず、物と名のつく物は軍用も民用もない、一物も残さず奪取して、速やかに自国領内に持ち込んでしまえ！ というソ連の国家意志であり、至上命令であったのだ。それが街や村落に近いと住民達が争って掠める。そしてそれを発見すると監視兵が、いとも無造作に自国民に発砲し、時に射殺する。これは大変な国だぞ！ と異様な恐怖と戦慄に襲われた。

列車は西へ

走る時間より止まる時間の方が長いガタガタ列車は、夜半過ぎ、大きな駅の引込線に入った。駅名を聞

くとクイブシェフカだと言う。シベリア鉄道本線の駅で、ブラゴエ鉄道との分岐点である。この駅を出発して東西いずれに走るか。東すればウラジオ方向、西すればモスコフ方向、捕虜抑留か帰国か、運命の分岐点でもある。列車は終日動かない。翌日は吹雪である。かつて「興安風吹きすさび……」と、実感こめて歌ったが、ここまで来て見ると満州はるか南である。捕らわれの兵に吹くシベリアの嵐は暗く厳しい。夜になってやっと動き出し、駅を出て速度を増したが、どちらに向かつて走っているのかさっぱりわからない。磁石も利かない、何か確かめる術はと一心に見つめる。松や白樺の枝の張り様、吹き積める雪の具合、時に見せる空の色、そのいずれを見ても列車は確実に西に向かっている。ああ、運命の骰（サイ）の目は遂に抑留と出た。万事休す。祖国帰還の望みは消え、列車は西に行く。祖国は遠ざかる。

汽笛一声

列車の西進で捕虜抑留が判明してからは、日がたつ

につれ不安、自棄、諦めの物言わぬ集団となり、吹雪の毎日がさらに暗く重苦しい。完全にソ連給与となり、基幹停車駅で配食されるが全く不定期。満州国内と異なり、他に補給の道なき若い胃袋は、いかに運動しないとはいえ、黒パンとキャベツの浮いた塩湯スープだけでは腹にこたえぬ。早くも餓鬼道転落の淵へと追われてゆく。

シベリア鉄道は行けども行けども吹雪の山嶽地帯で、雪に埋もれた赤松や白樺の原始林が続く。幾日目か、あえぎながら登っていた列車が突然止まり、ソ軍の輸送指揮官が来て、「兵隊を三十人出せ」と言う。驚いて聞くと、「石炭が不足で走れない、補充用の薪を切るのだと言う。機関車に近い車両から一個小隊を出す。径十五センチから二十センチくらいの白樺や赤松を長さ二メートルぐらいに切断して燃料車に積み込む。燃料の現地無償調達である。さすがはシベリア機関士、心得たもので、大きな生丸太を次々と汽缶に投入し、蒸気圧の上昇とともに高らかに汽笛一声、出発進行する。この一声、久し振りに列車の各窓に笑声を

起こす。

チタに着く

孫呉、新京を通じて満四年余にわたる作戦室の勤務で、日夜チタ以東、極東ソ連の地図に接し、概念的には満ソ国境地帯の兵要地誌が頭に入っていたはずだが、実際に見聞するシベリアの現実には、想像をはるかに超える広大無味の原始林に、激しい吹雪の山また山が果てしなく続くだけである。幾日たったか、今までは規模の異なる特に大きな駅の引込線に入り停車した。久し振りで地に足をつけての用便と柔軟体操で、わずかながら足腰を癒やすことができた。食事受領に行くと、服装は異様であるが何と日本兵である。責任者の軍曹に駅名を聞くと、「チタだ」と答えた。我々が来るまでほとんどが満洲里經由の部隊で、輸送列車も何十本か多過ぎて分からない、行き先もいろいろで、情報としては、モスコ、イルクーツク、タイシエツト、カラガンダ、タシケント等らしいが不明、当チタでも何万人も労役に従事しているようであると

言う。モスコ、イルクーツク以外はどこにあるのか、聞いたこともない地名ばかりである。すでに三カ月もここで使役に従事しているという彼等の方が何だか落ちついて見える。互いに励まし合つて別れる。食糧は相変わらずの黒パンだが、塩菜スープの代りに珍しく肉の匂いのある粟の粥が配食されたが、腹の足しにはほど遠い。夜半に列車は再び西進を始め、相変わらず吹雪の荒野を走る。夜が明けると、今度は所々に人家や集落があり、雪に埋もれた家々の煙突から立ち上がる煙が家庭のぬくもりを痛感させ、望郷の思いひとしおである。

バイカル湖

ウランウデを過ぎさらに西進を続ける。先頭車両から次々と歓声が上がリ、窓から首をつき出す者が見え始めた。一体何だろうかと思つて、吹雪の中から海の如く広がるバイカル湖が見えてきた。突然「海だ！ ウラジオに着いたのだ！」と若い兵が叫ぶ。ブラゴエを出て十日以上もシベリア鉄道を西進し、チタ

を過ぎ、昨日はここがウランウデだ、列車が南進すれば蒙古行きた、相当数の日本軍がその方向に送られたらしいという先着日本兵の情報に、暗い顔をさらに暗くしていた彼等だが、諦めきれぬ望郷の心は、シベリア最大の湖、バイカルを見て日本海と思ひ、ウラジオに着いたと叫ぶ。まことに淋しく哀れである。雪の赤松、唐松、白樺の原始林の合間から広がるバイカル湖は、実に堂々たる大海の偉容を見せ、湖上は黒々と波が打ち、湖岸の汀は真つ白な氷雪に覆われて、結氷期の近づきを思わせる。湖岸を走るガタガタ列車は横揺れがひどく、殊に上段は、波間に翻弄される筏に乗っているようである。それでも湖岸を走っていると古里、瀬戸内海沿岸の光景がしきりと思ひ出されて、終日、窓隙の間から眺め続けた。

三〇キロ収容所に入る

バイカル湖岸を揺られること一日、イルクーツクに着いた。さすが帝政ロシアの時代からシベリア行政の都。駅舎も古代純ロシア風の見事なものである。イル

クーツ管理局より少佐を長とする二十人余りが来て、ここが到着地ゆえ全員入浴せしめる、百人ずつ整列せよと言う。南嶺以来久しく風呂に入っていないので喜んで整列したが、例によって人員の点呼で時間がたつてしまい、肝心の入浴は、飯盒に湯をもらい駄々っ広い洗い場で洗うだけで、カラスの行水より劣る。それでも一応垢をこすり顔を洗ったので、体が軽くなった気がした。貨車に帰ると、これより部隊を二分し、それぞれ所定の収容所に入れると宣言し、本隊及び一―四中隊は現大隊長池田尹彦少佐、残り五―七中隊は城丸太次郎大尉（軍司令部副官）を指名し、ブラゴエ以来の車両を二隊に分割して再び出発した。今度はシベリア本線を外れて粗末な単線で、森林鉄道のような怪しげな路線を時速一〇キロか一五キロぐらい、約二時間ほどでイルクーツクより三〇キロ、雪に埋もれた山中の収容所に到着した。時に昭和二十年十二月十二日、雪のやんだ午後の太陽が山峽に隠れ始めたころであった。収容所は、つい最近まで、今登ってきた鉄道建設工事に就労せしめられていた囚人ラーゲ

リで、我々がその交代要員である。周囲を高さ三メートルくらいの頑丈な板壁で囲み、四隅に監視用望楼、その間をさらに幾重にも有刺鉄線を張り回らせてある。出入口は表門一カ所。建物は丸太を組み合わせ、隙間に干草や苔を詰めた半地下二段式のブラックである。長い長い人員点呼の後、それぞれの隊舎に落ち着いた。こうなったら仕方ない、すべては明日からだ、と諦め、とにかく久し振りに足を伸ばして寝ることとした。

南京虫の夜襲

一カ月半に及ぶ長い虜行の果て、ようやく到着した所である。柵にイワシを並べたように詰め込まれた人いきれとベチカの温もりで室内も暖かくなり、心身共に疲れ果てた若い肉体は、やがて音もなく眠りに落ちた。どのくらいたったか、あちらこちらで明かりがつき始めた。輸送貨車以来の手製ランプである。しばらくたつと舎内は万燈を灯したようになり、全員起き上がったってしまった。南京虫の大夜襲である。ロシア囚人

を相手に生きてきた強盗共が相手を失い、しばらく潜伏して空腹をかこっていたところへ、彼等にとつては、その女よりもやわ肌の若い日本人だ。絶好のごちそうである。たまつたものでない。この夜襲、当分の間は悪戦苦闘が続くことと思えばまさに身の置きどころとてなく、つくづくと虜囚の哀れさを痛感し、終夜もだえ明かす始末となつた。

米国の戦力を思う

満州に侵攻したソ連軍でまず驚いたのは、米国製自動車であつた。シベリアに入つていよいよアメリカの戦力を痛感せしめられた。イルクーツクにおいても、市民の使用する食糧品は、小麦粉の袋、缶詰類の梱包箱はすべて星条旗印であり、我々が従事する鉄道工事も、これに使用する資材は、枕木を除く以外は犬釘一本に至るまで皆米国製品である。シベリアにおいてしかり、欧露及び欧州戦線は想像に余りあり。地球規模ともいふべき東西二正面の大作戦を敢行しながら、なおかくの如き膨大なる食糧及び工業生産力、彼の戦力

を思うとき、軍配を上げる機を逸した南方戦線、国力の差をつくづくと考えさせられ、U・S・Aと銘のある長いレールを毎日のように見入る。

七三キロ收容所に移る

工事の進捗に伴い八月に、この地三〇キロ收容所より七三キロ收容所に移る。ここもまた囚人ラーゲリの跡である。いよいよ深山にて、関係者以外訪れるものはただ松風と月あるのみ。時に奥シベリアの山中は秋酣にしてキノコが多く、久々に満腹感を得た。

虜囚一年、遂に病みて倒る

「人心獣体」をモットーに鍛えた体も遂に風邪の冒すところとなり、発熱三十八度を超え入室患者となる。我々の作業隊が犠牲なく今日あるは、ソ連軍軍医も心服する名軍医石塚少佐を有するによる。心配された肺炎も事なく、一週間の療養で退室することができ幸運であつた。

病床詠史

静かに更けゆく山の獄舎の病室に、自分の心臓の音を一つ一つ数えていると、月が松の雪に映えて青白く輝く。その雪に思いは尽きない。

シベリヤの山の獄舎ピトヤは花もなく

風雪月に想い乱れる

再び作業に出る

案じてくれた多くの戦友に助けられて再び作業隊に復帰する。熱発後は心身に力なく、ただ一日を生きであるのみ。かてて加えて作業は酷寒期に入り、ソ側の鞭励いよいよ熾烈となる。殊に夜間作業も多く、焚火以外は施設、装備皆無の露天のこととて凍傷患者も多く出る。

物思う気力も失せて一塊ひとくれの

生ける屍となりし此の頃

ダモイ東京

ソ側の関係者より「スコーラ、ダモイ」の言葉が出

始め、またかと思いつつも異常を感じていたところ、昭和二十一年十二月二十八日、鉄道工事の概成とともに帰還の態勢にて全員、イルクーツク市に出る。市駅西方四キロ、メリニカボなる橋梁にて不慮の列車事故起こり、徳島県出身の多田輝男君ほか六人が瞬時に消え、重軽傷者多数の惨事があった。

故郷に帰る望みも一瞬に

闇の鉄路に無惨や果てぬ

運命逆転

いわれも語らず本隊と切り離され、一年間辛苦を共にした戦友と別れ、雪の第五ラーゲリに転属せしめられた。ここは、その名も通称「地獄ラーゲリ」と言い、自動車工場建設の雑役、発電所の石灰卸下（シャカ）等に従事する。生きながらの地獄、詩興皆無である。

古里に帰るのぞみも絶へ果てて

雪の獄舎の暗きこのごろ

奇遇

イルクーツク第五ラーゲリは、苛酷な強制労働と飢餓と伝染病のため、越冬一年で数百人の犠牲者を出した。その後遺症が甚だしく、入所者も補充補充の寄せ集め集団で、伝統の姿は破壊せられ、「地獄ラーゲリ」の名も宜なるかな。炊事よりの飯上げ当番に護衛を要する状態である。その中であって、少数ながら我々が新京以来の編成のまま入所し、互いに励まし合いながら行けることが何よりである。かかる苦難のラーゲリの一日、人員点呼でぞろぞろと並んでいると、突然「稲見班長殿」と呼ばれた。驚いて振り向くと、何と昭和十五年夏、初年度下士官候補者の助教として教育した、原隊の最優秀候補者であった埼玉県秩父出身の教え子山崎力三君である。相別れて七年、航空に転じ本部指揮班長として活躍していたとのこと、正に奇遇。古人のいう「一葉の浮草大海に帰す、人生何れの処かあい逢わざらん」と。その夜語り、再度訪ねるときは、いずれに転ぜしか、不明であった。

シベリアの雪の獄舎にその上の

教へ子と逢い一夜語りぬ

帰還第一陣

イルクーツク駅の引込線で、石炭やセメント卸し専属のようになり、毎日毎日黒くなったり白くなったりでの苦役が続いているうちに、シベリアの陽ざしも柔かくなり始め、「地獄ラーゲリ」にもようやく春が訪れた。

「ダモイ東京（祖国帰還）」である。まずは働けない病弱者からではあるが、常々、ハラシヨラポータ（作業優良者）から順次に帰す、と騙して（だま）騙してに勞役に駆り立てている手前、そのみでは後に残る者を騙す口実がなくなる。幾らかはその実を見せなければならぬ。我が作業班にも一人が指示された。入ソ以来の戦友で、若いまじめな、埼玉県川口市出身の浜田博兵長を推せんした。幸いに祖国組に入ることができ、帰還第一陣として、昭和二十二年四月六日、小奇麗な服装に着替え、喜色满面、ラーゲリを出て行った。

諸共に苦難の道を歩みきし

友は祖国に今帰りゆく

悲春望郷

「ダモイ東京」でざわめいたラーゲリも、第二、第三陣の声はなく、雪解けとともに再び作業が活発化した。越冬二回、春がくれば桜を思う。梅、桜、菊、どの一つをとっても日本の国は良き哉と思う。

第三収容所

バイカルの氷も解け、帝露の悲史を秘め、イルクーツク市を二分して流れる大河アンガラに筏が下るころ、駅に近いアンガラ大橋のほとりにあるイルクーツク製材工場内に山から降りてきた我々を中心に、二〇〇人程度で第三ラーゲリが再編された。主力は製材、一部は街の下水道工事や雑役に従事する。越冬二回、シベリアの生活にも慣れてきた少人数の収容所のこととて、地獄ラーゲリとは異なる雰囲気となったが、ほとんどなく民主グループと名乗る連中が現われ、文化活動と称する洗脳教育が開始された。また、誰言うとな

く、一般の抑留期間は二年間で、ハラシヨールポータから逐次帰国、等のデマがまことしやかに流れる。

未だ見ぬ吾子

シベリアの夏は美しい。街の陽ざしを受けて路傍に遊ぶ幼な子の姿愛しく、休憩のとき、これを見てみると、身ごもりし妻、尋常であれば既に吾子生まれてあらむ。母も子もいずこにあるか。み国病む苦難の道を強く生き行けと、なすすべもなき父の悲哀をかこちつつただ祈る。

父知らぬ吾子生れしかみ国の子

真幸くてあれ母の愛手に

消息

並木の緑も濃くなり、アンガラ大橋を渡るとき、河風の涼味が作業疲れの身を慰める。街の中心にある機械工場にはイルクーツク第一ラーゲリがある。昨年のも、血染めのメリニカボで別れた戦友森分治郎氏が、一人、本隊から離れ、地区の通訳としてここにおるこ

とを知った。立場上いろいろの事情を知るであらう、別れた本隊はどこに、多くの友の消息はと、その門前を通る度に思うが如何ともいたし方ない。

技術者の良心

地下一メートルにも及んだ凍土が解けると、イルクーツク市の中心街マルクス通りの下水道新設工事が開始された。この工事には、新京以来の盟友であり、先輩である関東軍経理部の技術准尉で、福島県出身の川内與太郎氏が担当者となった。彼はこの方面の権威者（工学博士）で、逆にソ連側の技術者を指導しながらの作業である。すでに第一陣の帰還者を見送り、祖国帰還に希望を得て以来の我々には、ソ連の都市整備の労役など腹立たしいばかりである。中には、地下のことだ、ソ側にわからぬよう手技きはもちろん、我々が帰国後に逐次故障が発生するよう何か工作して……と謀る者もおった。川内准尉は絶対にこれを許さなかった。また、ソ側にも知られるようなことはしなかった。彼は、下水道工事などというものは、少なく

とも今後百年以上は残る事業である。このような工事に、虜囚とはいえ日本人が関係して作った、という名が永久に語り継がれる、技術者の良心が許さぬ、と説論する泥まみれのヒゲ面に光る両眼は、ラーゲリで隣りに横たわる瘦せて疲れ果てた俘虜の目ではなかった。

祖国の香り

強制されるままに、その指示通りカタカナで書いた俘虜用往復葉書。祖国に届くなど信じてもおらず、まして返事が返ってくることなど夢にも考えなかった返信が、一年余りたって幸いに届いた。ソ連軍の満州侵攻とともに北鮮に疎開した妻からである。昭和二十一年九月十五日、平壤生まれの娘とともに故村の家に帰還し、母子共に健在とあり。感無量、お守りの如く肌に着け、日夜祖国の香りに浸る。

父も無事兄も還れり吾子生れ

健やかなりと妻がふみきぬ

バーニヤ（入浴）

その昔、世にあるときは楽しき憩いの入浴も、シベリアではただノルマ遂行の苦役でもある。浴場はここ第三ラゲリより往復四キロ余、二時間を要する。それも、作業に支障のなきよう夜間のみ。寝台の下に隠れて出ない者もいるので、同じ者が二度も行かねば頭数が揃わない。

楽しかる慰安の筈の入浴も

夜半の作業の一つとなりぬ

秋は物思う

また秋が来た。アンガラ大橋の南の袂には、西側に帝政ロシアの栄華を偲ぶ大きなニコライの塔が崩れ残り、東側には黒々と光るレーニンとスターリンの像が大空の下に向かい立つ。秋は物思う。

真澄みたる秋空の下向い立つ

偉人よ塔よ何想うらむ

ニエチヴォ（仕方ない）

製材工場で川から原木を揚げる作業について。床下の裸電球で足もとの用心をしながら働いていると、製材機から落ちる木屑やオガクズをターチカ（一輪車）で汽罐に運んでいる汗だくの労働者が、行き交う度にニヤリと笑う。どこかで見覚えがある。声をかけると寄つて来た。驚いたことに、先日まで絶対権力者として我々に君臨していたナチャニク（工場長）であった。聞くと、何か失敗して監獄行きは免れたがこの通りだ、今後のことはわからぬ、命令は絶対でニエチヴォと、肩をすくめて苦笑した。

また、街外れのれんが工場で雑役をしているとき、そこで働いている囚人の一人から慣れ慣れしく抱きついて声をかけられた。見ると、山の収容所にいた作業係で、我々がキツネと呼んでいた上級中尉である。理由を聞くと、「泥棒したのがバレたのだ、ニエチヴォ」と大きく両手を広げて肩をすくめ笑いながら、女囚の呼びに答えて仲間の方へ去って行った。

昨日の工場長が今日はその工場の雑役夫になり、歴

戦の上級中尉が女囚に交じって強制労働、彼等の間には、前官等一切無関係であり、ニエチヴォである。それではなければ生存そのものがないのであろう。我々には到底考えられない。民主グループをして、民主主義の天国の如く宣伝、洗脳する共産主義国家に見る現実の一面である。

ニエチヴォで如何なることも諦める

この国の人哀れと思う

尻の皮

ソ連の俘虜管理は、ただ労役に耐え得るか否かにあ
る。毎月、ソ連の軍医（ほとんど女性である）が身体
検査をするが、聴診器一つも使わない。獣医が牛馬の
状況を見る如く、尻の皮をつまんで引っ張り肉付きを
見るだけで、一級、二級、三級及びOK（オーカー）
の四段階に区分する。一級、二級は一般労働、三級は
軽作業、OKは作業免除となる。我々が見れば、二級
以下は作業に耐え得るような状態でなく、全く病人で
ある。

春以来の労働で体力の消耗した者は逐次抽出されい
ずれかへ転属してゆく。労働力としての価値を失った
日本人俘虜は、しばらく休養せしめた後ダモイという
ことのようにである。名古屋市熱田出身の若い戦友小島
泰一郎君が、夏の終りごろから三級となり所内勤務が
多かったが、時雨降る寒い日、作業から帰ってくる
呼び出され、翌日十人ほどの組となって出ていった。

心して心して行け此の道は

み国拓かむ新しき道

チェレンホーボに移さる

第三回目の冬が来た。慣れたとはいえシベリアの冬
は恐ろしい。ポツリポツリと抽出ダモイで、生来の頑
健を恨めしくさえ思う。時に、イルクーツク市西方二
〇〇キロほどの炭坑町チェレンホーボに移され、ここ
の第六ラーゲリに入る。移動する度に西へ西へと行
く。祖国はますます遠ざかる思い。国敗れて三年、老
父は、妻子は、すでに帰った戦友達はと、凍りつくよ
うな月空を仰ぐとカリの群が一陣、二陣と南方に向

かつて飛んで行く。

天雲の遠隔の極み海洋の波濤の東

吾が生れし大和島根はありがたき国

昭和二十三年元旦

かにかくも生きてあることが唯一つのラーゲリの正月である。心中独り東天を拝し、「何としても生還を」と祈念する。このラーゲリは、終戦直前に中国戦線より長駆満州に転じた、精銳藤兵団（第三十九師団）の一部である。そのまま中国戦線にあれば、かの蔣介石の名布告を得て、早々と祖国に帰還していたであろうにと運命の奇を思う。幸いに山口県出身の本広十一という陸士五六期の、若いが立派な中隊長の下によくまとまっていたが、シベリア民主運動の高まりとともに将校全員、いずれかに転出し、日ごとに殺伐化して行った。

待つ父が妻が愛児が空しくも

また迎えしか新しき年

酷寒の日々

チェレンホーボは石炭の街で、夜空にポタ山の赤い火があちこちに燃えている。イルクーツクでの作業が関係してか、我々はここでも駅に近い製材工場に働く。雪の中の丸太転がし、深夜の製材、酷寒の一日は、帰国も忘れ果てるほど寒くひもじい。

古里に還ればあれもこれも皆

腹一バイに食べて見むかな

無情

貨車より丸太卸しの作業中、下腹部を打撲し人事不省となる。その後遺症で体調悪く、病みて二週間、第八ラーゲリに入室した。幸いに長崎県出身の旧知、綿谷軍医大尉ありて事なきを得た。たまたま爆破による飛び石のため傷死した友がおり、病床にこれを見舞った。

雪深き奥シベリアの獄舎にて

事故に死にたる若き友はも

第三二作業班

その昔、平氏にあらざる者は人にあらず、とか。シベリアラーゲリでは民主グループ、これを以て任ずる。反軍闘争も功を奏し、中隊、小隊、分隊の名は消え、彼等の指名する兵士を長とする作業班となる。我々も第六ラーゲリ第三二作業班となる。大隊長に代わる民主委員長なる者、虎の指示か、その威におもねるか、次々と巧妙狡猾なる指令を発する。そしてそのすべてが、労働者の祖国ソ同盟強化のため生産を向上しようと労働に駆り立てる。このころまた壁新聞なるもの賑わしく、各班こぞって工夫をこらす。我が班にも執拗に促す。反骨首をもたげ寄稿す。曰く、我々の祖国は山紫水明の桜咲く国日本である、と。そして、土地固有はマルクス、レーニンの専売特許ではない、と。奈良朝の班田、口分のことを書き和歌二首を添えたるところ、不思議と裏好評なりき。

和らぎを治政の要と定めたる

奈良の都のみ代をしぞ想う

賢しらに物想より捕虜ボケて

ダモイを待つにしくものはなし

在ソ民主運動

抽出ダモイで小ラーゲリは逐次閉鎖集合され、チェレンホーボも第六、第八ラーゲリを残すのみとなる。このころ、いわゆる在ソ民主運動なるもの熾烈を極め、これにおもねるシベリア民主主義者、我が物顔に横行し、正に暗たんたるものがあつた。

言いたくは何とでも言へ我はただ

我が行く道をひた進むのみ

凍尿街道

ラーゲリの便所はすべて屋外にある。それも兵舎から近い所で十五、六メートル。遠い所は四十メートルも五十メートルも離れている。栄養失調で慢性的空腹、水分の過剰摂取は必然的に頻尿となる。殊に酷寒期になるとさらにその度を増す。多い者は一晩に七、十回ぐらい、少ない者でも四、五回ぐらいは通う。竿の先をつまんで走るのだが辛抱しきれず、道中で漏

らしてしまふ者が多い。何分にも人数が多いこととて、黄褐色に凍った通路は滑つてよく転ぶ。危ないので翌日は砕いて除去するが、次第次第に高くなり、兵舎と凍尿の山の谷間を歩くこととなる。名づけて「凍尿（しょんべん）街道」と呼ぶ。

世に在れば花の若武者哀れなり

尿もらしつゝ夜途を走る

手ばなと廁かわや

この国では、老若男女の別なく、実に器用に手ばなをかむ。紙のないラーゲリではチリ紙に苦勞するが、ソ連人は紙は不用で、所かまわずチーン、チーンとやる。モスコーのお偉方はどうするか知らんが、我々の接する者は労働者はもちろん、カピタン（大尉）でも女性軍医でも、工場長でも美人事務員でも、皆、チーン、チーンである。紙のないまま、まねしてみるが、なかなかむつかしくてうまくいかぬ。

シベリア生活も五年目ともなると、ソ連人との共同作業が多く、片言のロシア語で何とか事が足りる。シ

ベリアの部落では、一般に個人家屋に便所はない。部落ごとに、その大きさに応じて、一、二カ所、共同便所がある。たいていは板囲いのバラックで、中に入ると、小は日本の駅や学校と大体同じであるが、大の方は面白い。中央は通路で、両側に一段高く板張り舞台で、径三〇センチぐらいの円い穴がずらりと並んでいるだけで、個人個人の仕切りがない。それでも、女性の方には通路側の下部一メートルぐらいは目隠しがある。いずれにしても、混み合うときの尻合（しりあい）は壯観である。生理現象は自然の摂理とでも割り切っているのか、これまた老若男女人種を問わずおらかなもの、我々と共同使用である。彼等是用済み後拭かないのか、ほとんど見たことがない。また手を洗うこともない。まことに簡便利である。これもまた伝統の文化とでも解すべきか。

シベリアのイモ

凍った馬糞をジャガイモと間違えて持ち帰るほどの空腹である。休憩時、カンボーイ（警備兵）の目を盗

んで、ジャガイモ畑の捨て残りの屑イモを拾い持ち帰ってゆで、皮をとって飯盒の中でつく。餓えた口には美味この上ない。ジャガイモを殊のほか大切にすることの国の人々が捨てる屑の屑である。

獄中四年

古来、「一日千秋」という言葉がある。とすれば、一万日に余るほどの望郷四春、望みと願いがいよいよつる。炭坑町のシベリアの正月は、雪に消えないポタ山の煙と、ときどき走り去るトロイカと、煤けた雀が餌をついばむくらいが我が目に映るだけである。

赤旗を部屋一パイに飾り立て

この正月も四度むかえぬ

チェレンホーボ哀歌

ポタ山に赤い火の燃ゆる炭坑町は、見る者によっては、まことに平和でのどかな風情でもある。シベリア民主運動の昂揚とともに、文化活動として演芸班が結成され、歌に踊りに演劇にといろいろ苦勞し多忙であ

る。我々に懐かしい流行歌や演劇などは次第に影をひそめ、『異国の丘』が酷評され、小林多喜二や徳永直のものとなり、ゴリーキーとなり、そのほとんどが革命的なものとなった。しかし、我々がよく歌ったのは『国境の街』であり『誰か故郷を思わざる』等であり、また当地で作った『チェレンホーボ哀歌』であった。

一、ここはシベリア北の国

広い荒野にポツツリと

煙棚引くあの夢の町

黒いダイヤの咲く所

二、今日も燃えてるポタ山の

赤いトロリ火なつかしや

走れトロイカ恋路を踏んで

招く夜空の北斗星

三、雁が飛んでる南の空へ

今日も昨日もまた明日も

緑色増す白樺道を

故国に帰るはいつの日ぞ

昭和二十四年風薫る

思いもかけぬ祖国の香りに接し、故国への便りに期待が持て、配られた俘虜用往復葉書に二十二年、二十三年と指示されるまま健在を報じたが、いずれも梨のつづて。しかしながら『日本新聞』もシベリア抑留の終期を迎えるかの如く、その感じが逐次変わってきた。米國と祖国日本を極悪非道と批判、狂氣的なソ同盟（彼等はソ連とは言わない）の美化礼讃、スターリンの神格化はますます激しくなるが、ただ引揚げとか帰還とかの記事が見られるようになり、特に不思議なる現象として、四年間大恩を蒙ったとして「スターリン大元帥に感謝」云々が社説に、あるいは「諸戸文夫（モロトフをもじったペンネームで、何者か知らぬが『日本新聞』の主筆）」とか、「高山秀夫」等と署名入りで宣伝される。そして「この恩恵にこたえるためにさらに労働を強化し、生産を向上しよう」と必ず結ぶ。

不法にも故なく自國に連行し、奴隸的酷使を強いた敵國の張本人に感謝とは何事ぞ、と怒りがこみ上げて

くるが、これはいよいよダモイが近い裏返しだと、薫風そよぐシベリアの広野に眺め入る。

帰國到来

チェレンホーボも遂に我々のみとなった。半月ほど前、元憲兵や警察関係の者が抽出され、第八ラゲリが閉鎖となり、合併されたので、作業に出る職場にはソ連労働者、特にウクライナ等欧ソの方からの強制移送者が多くなった。我々の交代要員だ。ダモイが近いぞ！ と全員が察知し、いつかいつかと待つうちに遂にその時が訪れた。昭和二十四年五月初めである。カピタン以下全員の立ち会いで、一人一人の番号と名前が読み上げられ、直ちに身体検査、所持品検査後、新しい綿入りのソ連労働衣が支給され、咲き始めたコスモスの見送りを受け、革命歌の大合唱で駅に向かい出発した。

チェレンホーボ駅の引込線は、我々の作業場の近くであった。この地最後の帰還梯団を輸送する虜行貨車の人となったが、悪夢のシベリア病民主主義の成果

は、アクチブの叫ぶ、いよいよ天皇島への進撃というアジに和し、「赤旗」の歌が天にこだまする。ただ、喜びの涙も出ず、遙かにボタ山の火が名残を惜しむ如く赤旗を振るのが印象的である。

後髪引かるる如くシベリアに

眠る友に独り別れる

帰国列車

もろもろの思いを残すイルクーツク、帝露の歴史に併せ、日本人悲憤の歴史を加えて悠久に流れるであろうアンガラ河。四年前、吹雪の中に古里瀬戸内海を偲んだバイカル湖も、色和む木々の合間に鏡の如く広がる。虜行列車は来るときと同様、主要駅で給水、給食のため、一日一回くらいの割で長い停車をする。四年前は不安とショックで暗闇で牛を輸送するようであったが、今回は「祖国ダモイ」という歓びを乗せ、春の山河を走る。列車の速度は遅くても帰心は矢の如く、四年間を生き抜いたどの顔も皆明るい。停車駅でも、あの嫌な「ダワイ、ダワイ」の声もなく、「ヤボンス

キー、ダモイ、ハラシヨウ（日本人、帰国、おめでとう）」の連発である。しかし、敵国人に歓送される我々も、車内では車両ごとに配置されたアクチブによる、訳のわからぬ学習、学習で寝ることもできない。

資本主義打倒、天皇島上陸作戦のための理論武装、偉大なる指導者スターリン大元帥万歳、そして終わりは必ず自己批判の強要で、狭い車内はつるし上げで結ぶ。ここまで来てダモイをフイにしては、という怖れからかかった魔術、異常心理は常人の想像を絶する。ウランウデ、チタと走り、幾日目にクイブシェフカに着く。敗戦の満州を北上し、凍る黒龍江の大雪原を徒渉して、地獄遍路の第一番札所ブラゴエシチェンスクより、掠奪物資の山積せる盗品沿線の果て、西進か東進かと祈りながら気をもんだ思い出の駅である。ここからは、アムールを隔てて満州を見ながらの極東ソ領シベリアを行く。クイブシェフカを出て、ゼーヤ河に架かる大鉄橋を渡るとき、誰かが「北の方にも同じ鉄橋が見える。この列車はまた満州に入る」と、不安そうに叫ぶ。「あれは昔、関特演のとき、日本軍の空

爆に備えて作ったはずの鉄橋だ、心配ない、列車は東に向かっている」と、慰めのつもりで話してやった。

これが自分を後、五カ月近くもシベリアに残される原因になろうとは。クイブシェフカを出て二日、極東ソ軍の本拠ハバロフクスに着いた。ここにはまだ日本人俘虜がたくさんいるようで、駅にも他の帰還集団の列車が止まっている。いずこも同じで祖国批判、ソ同盟万歳、スターリン万歳のスローガンと革命歌と奇怪な踊りである。

突然、梯団の委員長が、当地のアクチブ二、三人とソ軍将校とを同行し、スパイ容疑で取り調べると言う。駅舎の一室に連行され取り調べられたが、何のこともない、ゼーヤ鉄橋の件である。「出来上がって七、八年もたち、国際列車の走っている、誰の目にも見えるシベリア本線の鉄橋ではないか、ソ連自身が社会主義の優位性として書いていることを言ったのがどうしてスパイか」と。さすがソ連将校、「トーチノ、ブライナ（正しい、その通りだ）」と言って去った。その後、日本人アクチブから「反動奴、ファシスト奴！」

と、さんざん罵倒されたが、二時間ほどで列車に帰してくれた。

日本海の香り

ハバロフスクを出発した列車は、記憶に残るビギン、イマン、ウオロシロフと、一路南下する。ウオロシロフ駅は確か綏芬河へ、そして牡丹江、ハルビンへとつながるはず。ハバロフスクに残されず貨車に戻されたのが面白くないのか、今度は「反動とは口をきくな、孤立せしめよ」と、誰にも口をきかせない。昭和十九年の夏、少尉候補者二次試験の実兵指揮で、新京からはるばる来た綏陽の丘から望み見た綏芬河方面、そして、その後よく歌った「胡沙（コサ）吹く夜風北満の、ポブラニチナヤの丘に立ち、見下ろす広野グロデコオ、ソ連のトーチカほの見ゆる」に始まる綏芬河小唄を独り反復復唱する。

翌朝、遂に海が見えた。日本海である。海が見えるぞ！日本海だ、今度こそ本当に日本海だと大歓声が上がった。四年間、狂おしく恋しかった日本海であ

る。帰還者を収容するラーゲリは、その海岸に並んでいる。躍るが如き足どりで入った第一ラーゲリの広庭で、みんな日本海に向かって両手を広げ、腹いっぱい祖国の香りを吸い込んだ。

海の香よ祖国の香りよ日本海

その名祖国の名なるぞ嬉し

ナホトカ第一ラーゲリ

ナホトカ第一ラーゲリにはすでに先着の梯団がいて、異様な興奮に沸いていた。ナホトカ港は歩いて三〇分くらいのところにある。ここから第二、第三ラーゲリと順次に移って行く。第三ラーゲリは船が来れば即乗船で、それまでは待機である。その間、真の民主主義者として日本に帰すシベリア最後の仕上げをするため徹底的に教育するという。人間性も常軌も無視した全くの気狂い集団である。「船が来るまですることがない、反動は掃きぬ」のおどし文句を相言葉に、大衆討議と称し、誰彼となく犠牲者を吊し上げて氣勢を上げる。到着の翌日である。海中に用便するよ

う岸壁に作った厠で、波に戯れる廃物を見ながらうずくまっていると、隣りのタワリシチ（同志。すべて「タワリシチ何某」と呼ばねばならない）が話しかけてきた。昨日ここから吊し上げられた若い元満軍の日系将校が気が狂って飛び込んだが、幸いにここは無人の時がないのですくい上げられて病院に送られたという。かわいそうに、四年間も苦勞してやっとここまでたどり着いたのに、日本人が日本人を死にまで追いやるとは……と、尻合いの気安さからつい話しながら波間に落とした。夕食後、梯団アクチブの一人が突然、「タワリシチ諸君！ この中に当ラーゲリの民主委員会を誹謗している者がいるぞ！」と叫ぶ。「誰だ、誰だ」「彼奴だらう、引っ張り出して自己批判するまで吊し上げろ」「やれやれ！」と周囲に集まり怒号する。そのうちに本部アクチブが来て、「カントロローラ（事務所）に來い」と連行された。

さほど広くない事務所には長机が一つ置いてあり、その中央に委員長、左右に委員、前に椅子が一つあり、その周囲は「民主青年行動隊」と腕章をつけた若

い連中が立っている。ソ連側は一人もいない。示された椅子に座ると、委員長の右の男に「お前が稲見という反動スパイか！」とどなりつけられたので「稲見」だと答えると、「ハイと言え」と言う。「稲見だから稲見と言った。反動でもスパイでもないのにハイと言えるか」。「理屈を言うな。お前は関東軍司令部にいた准尉だということは分かっている。准尉という奴は兵隊から上がったくせに、威張りくさって兵隊を一番苦しめた、天皇制軍隊の大悪玉だ」。「何を言う。見解の相違だ。殊に司令部の准尉、下士官等は中隊当番の兵隊と同じで威張る相手も苦しめる兵隊もいない、私を呼びつけたのは何の用だ」。「お前は今日厠で、大勢のタワリシチに我々を、そしてソ同盟を批判しただろう、その糾明だ。お前のような奴をこのまま日本に帰せば、日本民主化の妨害になる。ここで民主主義精神が確固不動のものになるまでたたき込んでやる。それまでは絶対に帰さんぞ。それとも自分の罪状を告白して自己批判するか」。「大勢とは何だ。隣の者に日本人として当然のことを言ったただけだ。帰すとか帰さんとか

君達に権限があるのか」。「あるのだ。屁理屈をこねて自己批判しろ。帰りたくないのか」。「帰りたい。しかし、君達の言う確固不動の精神がすでに昭和二十年八月十五日までにできていた者はどうするのだ。事、ここに来て偽りの自己批判などできぬ」と口を結んだ。喧々囂々、怒号、罵声、威圧、脅迫が続いた後、正面の委員長が判決を下した。

「よし、帰れ。明日大衆討議にかける」と。

大衆討議（吊し上げ）

シベリア民主教育の総仕上げと称するナホトカの大衆討議という化け物には、これを経験した者でなければ、言語にも筆にも表現できぬ想像を絶した、空前絶後の一方的な地獄裁判である。泣き出して土下座する者、気が狂って海に飛び込む者の出るのも真にむべなる哉である。朝食後呼び出されて営庭に行くと、千人くらいもいようか、中央前面の台を囲み革命歌を歌いながら、腕を組み手を振り足を振り、踊りながらぐるぐる回っている。すでに気の毒な先客が吊されてい

る。しばらく見ていると「お前も」と台に上らされた。また一人反動が来たぞ、彼奴は何者だ、何者でもよい、吊し上げの反動だ、そうだ、そうだ、やれやれと、氣勢を上げる。本部ラーゲリのアクチブの一人が、タワリシチ諸君！ この男はしかじかか、かようかようで、昨夜我々がせっかく同志的温情をもって救つてやろうとしたが、それも分からぬファシスト反動だ、諸君の温情で民主主義者として目覚めさしてやってくれ、とアジる。後はただ聞くに耐えない罵詈雑言ばりぞごんと怒号で、波の如く寄せては返し、渦の如くぐるぐるぐるぐると回りながら革命歌と訳も分からぬ踊りである。めまいがしそうになり目を閉じると、目をあけてよく見ろ！ と大怒声。自分の目も自由にさせぬ。やがて終わりが近づいたのか、アクチブが再び上がったきて、どうだ、この多くの同志がお前を心配する温情が分かったか、分かったら今までの罪状を正直に告白して自己批判しろ、と決めつける。初めのうちは、何をぬかすと心中反論していたが、心身ともに疲労困ぱいの極に達し言葉も出ぬ。そのうちまたまた二人連行され

てきたので、こいつは諸君の同志的温情がどうしても分からぬ憐れな奴だ、こいつのような反動はシベリアへ送り返して、白樺の肥になるまで働かすほかない。然り！ そうだ、そうだ、で最後はインターナショナルの大合唱で結び、一時間に及ぶ吊し上げが終了した。

何が同志的温情だ、虎の威を背に「帰国」という呪文で生殺与奪の権をほしのままにし、大衆裁判という気違い状態を作り出し、同胞を悶死せしめるほど苦しめることが君達の温情かと怒りながら、ふらつく足で部屋に帰ると、チェレンホーボから一緒に来た若い連中が寄ってきて、「お気の毒です、ご苦勞様でした」と小声で慰めてくれた。

午後になって腕章の若者がやってきて、「私物を持って営門まで来い」と言う。いよいよ来たたと観念して出て行くと、民主委員長以下昨夜の連中がいて、委員長が「これからお前を第四ラーゲリに転属せしめる」と薄気味悪く笑った。残念至極なのは、その時まで持っていた、入ソ以来日記式に小さい字で克明に記

載していた二千首に余る歌日記をベチカに投入されてしまったことである。

反動ラーゲリ

シベリア四年間の最後で遂につまずいた。羊の屠所に引かれる如く意気消沈、一人第四ラーゲリの門をくぐった。翌朝飯盒を提げて炊事に立っていると、後ろから「君も来たのか」と肩を叩かれた、振り向くと、オルハの山中で一緒にいた兵庫県出身の玉置中尉である。お互い無事を喜んだ。ここは反動ラーゲリだよ、でも命までは取らんよ、辛抱しようや、引揚船への員数の関係か、ここからもいくらかずつ帰って行くよ、と静かに笑った。

働かざる者食うべからず。帰還を外された我々にソ連は一日もただでは置かぬ。翌日から早速ナホトカの築港工事の雑役である。ここへもアクチブが執拗にやってくる、さすが反動のプロホラポータ（作業不良者）。ダワイもなければベストリー（早く）もない。

白樺の緑が濃くなり、コスモスが乱れ咲き、次々と

引揚船が入港し、次々と日本に向かって出港して行く。踊りながらタラップを駆け上る帰還者を鉄条網越しに見ながら、朝鮮か満州からかの掠奪品と見ゆる懐かしい井桁印（住友のマーク）のクレインの林立するナホトカ港の拡張工事。目の前に魚を置いて首縄が届かぬようにした猫と同じで、正に残酷な苦役である。玉置さんもいつの間にかいなくなった。そのかわりイルクタークの地獄ラーゲリで能率給与（ノルマ遂行パーセントによる食事量）という、人としてあるべからざる共食いの惨状を強いられたとき、「一食が豌豆三十五粒、死んでも忘れんぞ！」と憤慨していた山からの戦友で、元警察官だった渡辺与作氏と再会した。もう少しの間だ、我慢しようやと励まし合いながら、毎日、日本海と、出入りする黒い大きな引揚船を眺め続けた。

帰還命令

九月に入ると木々の緑も日ごとに疲れが目立ち始めた。相変わらず海岸の岩山を崩して海に運ぶ港湾用地

の埋立工事である。四カ月もすると機械力もあるの
で、いかにプロホラボータでも人海戦術の効、広々と
した用地ができ上がり、逐次荷役機械が据え付けられ
る。ソ連製品は皆無で、ほとんどが住友、三菱等の印
がついている。ソ連にとっては火事泥の戦利品である
が、共に働くソ連労働者には何の関心もない、ニエチ
ヴォで実に見事である。

九月十四日、作業から帰ると全員集合の鐘が鳴つ
た。また民主委員のハッパかと、ぞろぞろ集まると、
ソ連将校が名簿を持って立っている。凶か吉かと整列
する。「今から呼ぶ者は順次右側に出て並べ、明日帰
還のため第三ラゲリに移す」。大きなどよめきが起
きた。次々と新しい隊列ができてゆく。駄目かと思っ
ていると、「一三六六六、イナミタダシ」と読み上げ
られた。大きな返事をして新隊列に入った。遂に来た
と不覚にも涙がこぼれそうになり、汚れ作業衣の袖で
ぬぐった。

呼ばれた者は二〇〇人くらいであった。直ちに入
浴、ひげそり、ボロ作業衣の返納、新作業衣（チェレ

ンホーボを出るとき支給）の点検など、あわただしく
行なわれた。アクチブが来て、祝福か何かのつもり
のアジを繰り返す。「偉大なるソ連同盟とその指導者ス
ターリン大元帥の温かいご配慮により、プロホラボー
タ、反動といえども、改心すればこのように無事祖国
に帰還せしめられるのだ。このご好意に感謝し、日本
民主化のため闘ってくださることを期待する」と。あの
吊し上げを経ってきた身には馬鹿馬鹿しい限りである
が、シベリア四年余の脅威は、最後のチャンスを逃す
まいと、このラゲリでも必死で「そうだそうだ、ソ
連同盟万歳、スターリン大元帥万歳」と叫ぶ。

翌朝、何回か経験した、自分達の目と同じ目で見
残留者の見送りを受け、徒歩三十分ほどで第三ラゲ
リに入った。すでに先着の乗船組で興奮する第三ラゲ
リは、目の前に引揚船の着く岸壁がある。ここでも
また最後の所持品検査である。リュックサックの裏返
し、靴の中、帽子の裏はもちろん、襦、紙きれ一枚で
も裏表まですかして見る。まことに慣れた手つきであ
るが、調べるのは日本人アクチブで、ソ連側はただ見

ているだけである。暖かい季節だから良いが露天の
と、寒かったら大変だろうと、何も持っていない身
はこの喜劇を見る気もせず、遙かに日本海を眺める。

明日は船が来る、それまで室内で学習待機と言う。

この期に及んでの学習とは……と聞いていると、引揚
船内及び舞鶴における対応である。「同志諸君！日
本では同志徳田球一、野坂参三の勝れた指導の下、日
本共産党は国会でも数十議席を獲得し、着々と日本の
民主化に向かって進んでいる。米、日帝国主義は我々
を怖れ、我々が舞鶴に上陸するのを緊急命令を出して
妨害しようとしている。諸君！諸君はこれからこの
ような反動の荒れる天皇島への上陸作戦を敢行するの
だ。スターリン大元帥のご庇護の下、偉大なるソ同盟
で四年間学んだ民主主義の戦士だ、頑張ろう」とアジ
る。「然り、頑張ろう、頑張ろう。代々木に直行だ」
「そうだそうだ、集団入党を勝ち取ろう。やろう、や
ろう」。そして「赤旗」の大合唱である。

その次は、船内及び舞鶴における細々の対応指示、
重症のシベリア民主病の脅威は言語に絶する。我々反

動ラーゲリの連中は消極的であるが、奥地から出てき
て第一、第二ラーゲリを経てきた組は気遣いである。
それでも夜が更けて静かになり、眠れぬ連中のヒソヒ
ソ話はほとんどが帰る故郷のここのようであった。

遠州丸

船の入港してくるのが見える。合図の汽笛が「迎え
に来たぞ！」と、腹の底までしみ込むように二回鳴っ
た。ラーゲリの門が開いた。最後のシベリア隊伍の五
列縦隊で乗船岸壁へ下って行く。ピタリと接岸した引
揚船の黒い船体には、はつきり「遠州丸」と日本名が
書かれている。二カ所からタラップがおろされ、到着
順に次々と乗船する。引渡しのため来ているソ連将校
達が、「ハラショー、ダスピダーニヤ（おめでとう、
さようなら）」と笑顔で一人一人握手する。「ダスピ
ダーニヤ」と答えてタラップを一気に駆け上がった。
船上には、船長以下関係の人々が「皆さん、長い間
本当にご苦勞様でした。お迎えに参りました」と、優
しく幾度も幾度もねぎらいながら迎えてくれた。感激

と感謝で胸がいっぱいになり、ありがとうございませ、と口まで出かかったが、乗船中である。また吊し上げられてはと、うるむ目で頭を下げ下げ通って行った。

乗船完了と同時に直ちに錨が上げられ、出港の汽笛が鳴った。ナホトカで梯団長を命ぜられたアクチブが青年行動隊を前後に並べ、「諸君！ 出港に当たりソ同盟とスターリン大元帥に感謝をこめて万歳を斉唱する」と甲板上から陸地に向かって万歳三唱で大拍手。

船はナホトカ港をゆっくりと進む。誰も船室に入る者はない。再び来ることのないであろうナホトカ港、遠ざかるシベリアを万感をこめて眺めている。やがてナホトカ港を出た船は速度を増した。昭和二十四年九月十六日の日本海は穏やかで、真っ直ぐに南下する。突然、「本船はただいまソ連の領海を離れました。舞鶴への入港は十八日午前の予定であります。これからいろいろと事務手続のため、係官が伺いますのでご協力を願います。なお、皆様のお名前は手続終了後、ラジオで全国に知らされます」と船内放送が繰り返され

た。ありがたいことだ、待ちに待つ肉親がラジオを聞いたら……と感激した。係官の説明を受け、それぞれ帰国するブロック、各県ごとに船内に入り、やれやれ地獄から解放されたわい、と思う間もなく青年行動隊のメンバーが、梯団長の指示と称し性こりもなくアジリ出した。

「諸君！ いよいよ明後日は天皇島に上陸だ。これからはまず船内での復員業務非協力だ。乗船後、反動に扇動されてフラついていてる同志がいる。そのようなことをさせないよう反動は孤立せしめよ。口をきくと叫ぶ。係官から渡された用紙に記入しようとする」と、「お前は俺の言っていることが分からんのか」と用紙を取り上げようとする。「何をするか、お前は復員しないのか」「そうだ」「何！ 復員ということを知っているのか、えらそうに言うな！」「知っている」「そうか、知っているなら言う。復員しないならお前達、今でも軍人だぞ」「軍人ならどうした」「軍人ならお前は兵隊、私は准尉だ。上官に命令するな！」と一

喝した。一同、一瞬ハッと静まったが、その後がまた大変であった。それでも白米、味噌汁、たくあん夕食を出され、涙をこぼしながら食べる者が多く、次第次第に落ちついて、エンジンの響きが気持ちよく深い眠りに誘い込んでくれた。

翌日一日、船は、晴天の日本海をただ舞鶴に向かつて走るだけで何も見えない。見えるのは三六〇度近い水平線と、ときおりカモメらしきものだけである。船内は相変わらずざわついている。渡辺与作氏が来て、「遠州丸二千人のうち、赤は三、反動組は一ぐらいの割合だと言う。あと一晩の辛抱だ、船内で事を起こさぬようにしよう」「そうですね」と語って別れる。廁で小便をしているとき、勢いよく隣りに来た若者を見ると、どうも昔見たように思う。「タカではないか? (近藤孝興君)」と呼ぶ。「エッ、あんた誰でえ?」と方言が返ってきた。「真つすぐ前を向いている。俺と親しそうに話していると吊されるぞ。君が小学校の五、六年生ごろ見送ってくれて出征した中西の稲見だ」「ああ、思い出した。ターニイ(正兄)さんで

え」「そうだ、君もシベリアにいたのか。苦勞したのおう。舞鶴まで俺には知らん顔しとれよ。一緒に帰ろうや」「ハイ」と素直に答える。これなら大丈夫だわいと、郷里の若者に安心した。

翌十八日も晴である。「おーい、日本が見えたぞー」と、みんな甲板に走って行く。目の前に近づく祖国日本の何と美しいことか。国破れて山河あり、これが祖国ぞ、日本ぞ。失意の杜甫と違い、希望に満ちて喜び帰る祖国ぞ! と眺めていると、「本船は間もなく舞鶴港に到着いたします」と船内放送があり、続いて上陸の順序や注意が細々とあった。船はしばらく停船の後、しずしずと棧橋に近づき、ぴたりと止まった。

遂に降り着いたぞ、俺には足があるぞ、幽霊ではないぞ、と、平棧橋を一步一步確かめるようにしつかりと踏みしめた。我々の祖国はありがたい。「ご苦勞様でした、お帰りなさい」の連呼で、本当に嬉しそうに迎えてくれる。それら関係の方々顔がたちまち曇ってしまふ。「ありがとうございます、ありがとうございます」と初めて声に出して答えながら上陸した。

舞鶴港引揚寮

昭和二十四年九月十八日、念願の祖国に帰還した遠州丸二千人の者は、直ちに係官の指示に従い検診、入浴、そして頭から真っ白に散粉器で消毒後、新しい衣服の支給を受け、建ち並ぶ旧海兵団の兵舎に収容された。復員局の処置で、青年行動隊員やアクチブの連中はすべて別棟に収容されたとのことで、寮内は平穩で、以後の復員事務は順調に進捗した。ありがたい日本食の給与を受け、オイ米飯だぞ、疊の上だぞ、馬鹿野郎こは日本だぞ、と語り合う姿も嬉しく、和やかである。

祖国の現状について係官の講演があったが、浦島太郎にはさっぱり分からない。ただ、本年の米の予想生産高は六二〇万トンと言ったのが忘れられなかった。渡辺与作氏ほか数人がやってきて、「明日はいよいよお別れです。長い間ありがとうございました。これから赤大根一味に仕返しの一撃を食わそうと思うのです」と言う。「何を言う。ここは日本だぞ。ここで問題を起こせば日本の法律が適用されるのだ。ナホトカ

の吊し上げを食った俺だ。君達の怒る心中は、分かり過ぎるほど分かる。だが、君達がその恨みの一撃を実行すれば明日帰れなくなるぞ。間違えば警察のブタ箱行きぞ。首を長くして待っている家族のことを考えて我慢してくれや、頼む」となだめた。さすが元警察官の渡辺氏、「分かりました」と同行の戦友を説き、繰り返し礼を言って帰って行った。どうしてあのように止めることができたのか、我ながら及びもつかず心配でおられず、別棟の彼等を訪ねると、全員談笑して、「心配で来たのでしょう。大丈夫です、ご安心ください」と、シベリアの汚れを落とした明るい顔で笑った。

復員者特別給与金として、一律千円ずつ支給があった。早速物品販売所に行き、新世界地図とアンパン二個を買った。百円である。千円もらったときは二、三カ月は、と思ったが、期待はいっぺんに吹っ飛んだ。パンを食いながら戦後の世界地図を見た。北海道、本州、四国、九州のみとなり、大日本帝国の名は消え、ただ「日本国」とある。世界地図を眺めながら、若い

復員者諸君が嬉しそうにパンを食べる姿がうらやましかった。

帰郷

新しい揃いの復員服で寮を出発する。門外には肉親を待つ多くの人々。我が子を、夫を、父を、兄弟を見つけて喜び叫びながら駆け寄る人々、抱きついて泣く老母、人情も街も昔のままでありがたかった。舞鶴駅に準備してくれた特別列車に帰郷ブロックごとに乗車、出発する。誰一人眠る者はいない。皆、窓の外を眺めている。京都駅にて東西に別れ、一路西に向かう。阪神地区の生々しく残る空爆の被害の跡に一樣に顔を曇らせたが、次々と途中駅にて降りる戦友達と、「頑張れよ!」「元気でなあー」と逐次別れを告げながら、翌朝宇野駅に着いた。棧橋を渡ると連絡船が着いており、特別の部屋と朝食が準備され、四国地区からの肉親が国鉄の配慮で迎えに乗船している。それぞれ早速出発して大声で喜び合う。幼い女の子を連れた妻の姿を見出し、近寄って声をかけた。驚いた母子と共

に席に落ちついたが、何も言葉は出なかった。幼子の目には、紺サージの揃いの復員服で目玉だけギョロギョロする痩せて貧相な姿は奇異に感じ、その母さえ見落とす父である。軍刀を手に颯爽たる写真を見せられてはいるイメージとは似ても似つかぬ、突然現れた父になじまぬもむべなるかなである。それでも、しばらくすると父の手渡すチョコレートを受取り、恥じらいながら我が膝に乗った。

高松駅から予讃線にて故郷へ。故郷の山河は昔のままでありがたく、ナホトカ以来初めて詩興が涌いた。

古里の田の面嬉しやさしい

朝日を受けて黄金波打つ

娘を妻に返し、多喜浜駅のホームに降り立った。昭和二十四年九月二十三日、秋季皇霊祭のよき日である。驚いたことに、故村の村長初め多数の方々がわざわざホームまで出迎えてくれている。国破れ、戦敗れ、敵国に捕われていた身、出迎える妻子と共に夜道でも帰ろうと考えていた自分、あの万歳歓呼で出征し

十二年前の駅に、再びまた多数の郷人に迎えられた。ありがたさが胸にこみ上げ、声にならぬ声で、出迎へと家族庇護の謝辞を述べ家路についた。

復員完了。そもそも復員とは、戦時召集の軍人の任務を解くことであり、本来ならば輝かしき凱旋のはずである。敗軍兵士の復員に、かくも温かき故郷の人々。日本の国はありがたい国である。夢に見た古里はやはり夢の通りありがたい所としみじみ痛感し、垣生山に向かって大声で叫びたい衝動に幾度も襲われた。

生命ありて我還りきぬ古里へ

古里人はありがたきかな

【執筆者の紹介】

略 歴

大正六年三月 愛媛県新居郡垣生村（現・新居浜市垣生）に生まれる

昭和七年 愛媛県立新居農学校卒業

昭和九年 専売局三田尻試験場修業、昭和十二年十

二月まで製塩教師として香川県坂出市製塩会社に勤務

昭和十三年三月 現役兵として満州独立守備歩兵第

一二大隊に入隊

昭和十四年七月 旅順、関東軍第一下士官候補者隊

卒業

昭和十五年八月 大隊本部付

昭和十六年六月 第四軍作戦書記

昭和十六年十二月～二十年八月十五日 関東軍幕僚

付として総軍作戦書記

昭和二十四年九月十八日 シベリア抑留生活から復

員

昭和二十五年一月 垣生村役場

昭和二十八年五月 合併で新居浜市役所に勤務。

昭和五十年三月 経済部長を最後に定年退職

昭和五十年～六十二年九月 民事調停委員（松山地裁、西条簡裁、新居浜簡裁所屬）、新居浜市史編

纂委員ほか市関係等各種委員

昭和五十一年 保護司、現在自活農漁業

平成九年、初めて大津市において「池田大隊、シベリアを語る会」の初会合があり、同席、以後交流を深めていただいておりますが、残念ながら本年四月に亡くなられました。この度、御家族の御好意により一部を発表させていただきました。

(岐阜県 鈴木 善三)

抑留生活

静岡県 小野 一 男

初めて見る異国、北樺太であった。陸続きであつてもこのように異なるものだろうか。樺太の面影とは全く違つていた。青々とした森林がなく枯れ木の山で、農作物も、馬鈴薯、キャベツ畑ぐらいで、ブタ、ニワトリは野放しでやせていた。手入れをしないからだ。私物でなく皆、国のものだからというこらしい。九月半ばともなると北国の秋はもう寒く、朝夕は火の気なしではどうにもならぬ状態であつた。

戦争のために人手がなく、取り入れが終わるまでの作業であるということで、イモ掘り、キャベツの取り入れをさせられた。日常の食べ物、少ない黒パンの配給だけで、イモを焼いて食べ、キャベツを生のままかじる。そのような日々が続いた。山にフレップと言ふ赤と黒の二種類ある酸っぱい味の実が無数にあつた。ソ連兵の目を盗んで取つて食べたものだ。宿舎の近くの子供達が鮭の干したのを持って、万年筆や鉛筆と交換に来た。どうせ使う事もないと思ひ交換することにした。珍しいものは割が良かった。

一カ月くらいでイモ掘りが終わつて移動することになった。雪がチラチラ降る頃である。行く先は「北海道ダモイ(帰る)」と言つて行軍が始まつた。西海岸の北樺太で一番大きな港町アレキサンドリアと言ふ所に着いたが、町を素通りして山の中へと連れて行かれた。私達は、二百人くらいの集団であつた。五十人くらい入れる元民家らしきところに分散された。彼等の説明では、北樺太各地にいる日本兵がそれぞれ作業を終えて集まつて来るので、全員集結までの間というこ